女優

上

渡辺淳一

女優

上

渡辺淳一

集英社

女優（上巻）

一九八三年六月二〇日　第一刷発行
一九八三年六月三〇日　第二刷発行

定価　九五〇円

著者　渡辺淳一

発行者　堀内末男

発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部　二三八―二八四二
販売部　二三〇―六一七一

印刷所　大日本印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© 1983 J. WATANABE　Printed in Japan

ISBN4-08-772435-2　C0093

女優（上巻）——目次

序章　5
第一章　誕生　16
第二章　脚光　72
第三章　恋火　113

装帧

原万千子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

女優（上巻）

序章

いま私の手元に三枚のレコードがある。いずれも今日では店頭から姿を消したＳＰ盤で、そのうちの二枚は中央のラベルの部分が赤色で、他の一枚は灰色である。三枚とも年月を経て古びているが、灰色のラベルのほうは右から左へ、「オリエント・レコード」と書かれ、その下に右から左書きに、「復活」「芸術座」「松井須磨子」と記され、中央に「月の砂漠」を思わせる駱駝（らくだ）と少年の姿が浮き出ている。裏面もそれとほぼ同じだが、「復活」のところが「復活唱歌」となっている。

赤色のラベルのレコードの一枚は、外側に「NIPPONOPHONE」と記され、やはり右から左書きに「さすらひの唄」「芸術座」「松井須磨子」とあり、裏面は「わしが仲よしや」「森の娘」「田辺若男」の文字が並んでいる。同色のラベルのもう一枚は、表が「水藻の花」で、裏が「火粉さん、山羊さん」とあり、いずれも松井須磨子が歌っている。三枚のレコードのジャケットに

は鷲のマークがあり、「日本蓄音器商会」と、日本コロムビアの前身の会社名が記されている。

この三枚のレコードで、私は華やかなりしころの松井須磨子の声を聴くことができた。

これらのレコードは、いずれもSP盤で、現在のプレイヤーでは聴くことができない。そのため、私は編集氏に、昔の写真でよく見る大きな喇叭型のスピーカーがついた手廻しの蓄音器を用意してもらった。これにレコードを載せ、昔の鉄の針を一本ずつつけて手廻しで捩子を巻く。

「復活」は、大正三年三月、芸術座の第三回公演で演じられたもので、いうまでもなく、トルストイの「復活」の劇化で、脚色演出は須磨子の愛人であった島村抱月である。

ここで須磨子は主人公カチューシャを演じ、その、劇中四幕目で、いわゆるカチューシャの唄を歌う。赤いラベルのレコードの一面は、その須磨子の歌であり、裏面は三幕目の、須磨子が演ずる莫連女の台詞が入っている。

この「復活」は、初め東京で公演されたが好評で、ただちに翌月から大阪「浪花座」で興行し、あと京都「南座」から中国、九州をまわり、連日大入り満員を続けた。これ以来、「復活」は芸術座の主要な演目となり、のち芸術座が解散するまで実に四百四十回の公演がおこなわれた。

この好評とともに「カチューシャの唄」は、たちまち全国に拡がり、実に四万枚のレコードを売り尽したといわれている。当時の蓄音器の普及度からみると、この売り上げは驚異的で、蓄音器を持っていたほぼ全員が、このレコードを買ったと思われる。

この歌の作詞は島村抱月と相馬御風の共作、作曲は中山晋平で、その大正時代ロマンチシズムを表す哀調は、大正から昭和への一世を風靡し、読者のなかにも聴いた記憶のある方は多いであ

ろう。

いま、松井須磨子を手っとり早く紹介するとなると、「カチューシャの唄を初めて歌った女優」というのが、一番わかりやすいかもしれない。

その他のレコードのうち、「さすらひの唄」は、大正六年十月に演じられた「生ける屍」のなかで歌われたものであり、これもカチューシャに次いで全国的に流行した。

あるいはご記憶の方もあろうかと思うが、冒頭は次のようである。

「行こうか戻ろうか、オーロラの下を、

ロシヤは北国、果てしらず……」

この歌も、大正期独特のロマンチシズムと哀調に溢れている。

もう一枚の「水藻の花」と「火粉さん、山羊さん」は、大正七年九月公演の「沈鐘」のなかで歌われたものであり、このなかで須磨子は森の娘と水の精の妻を演じている。

当然のことながら、いま須磨子の演技を目にすることはできないが、この三枚のレコードから、かつての女優須磨子の声と風格を想像することはできる。

ただ残念なことに、最初の「カチューシャの唄」は、何度もかけられてすり減ったらしく、絶えず小波のような雑音が入り、いささか発音が不明瞭である。それは、録音技術やレコードの質が悪かったせいもあろうが、他のレコードが比較的明瞭なのと較べると、「カチューシャの唄」だけが、抜きんでて、くり返し聴かれたからに違いない。

ところで須磨子の声だが、きんきんした甲高(かんだか)い声だったといわれているが、レコードで聴くか

ぎりではそうでもない。たしかに「水藻の花」や「火粉さん、山羊さん」のような歌では、やや燥いだような甲高い声だが、これは歌自体が、森の精や動物の声替りということで、意識的にそういう声にしたと思われる。それより、「カチューシャ」や「さすらひの唄」は、むしろ女優にしては抑えた、単調な歌い方である。この単調さは当時の歌全体に通じる傾向であり、須磨子だけに特別というわけでもないようである。

だがはっきりいって、須磨子の歌はそう上手ではなく、現在の歌手と較べると、数段劣るかもしれない。とくに須磨子の発声は沈むところがなく、いわゆる声が出しっ放しになっていて、いま一つ陰影が欲しい気がする。

しかしその陰影がなく、すべてを表に押し出すところが、須磨子の性格だともいえなくもない。なにごとも思ったとおりあからさまに出す、その性格が歌にもでていると考えると、その陰影のない声のなかにも、生前彼女の周辺の人々を苦しめたきかん気が見えているといえなくもない。

それにしても、須磨子は歌手でなく女優であったのだから、歌がまずかったとしても責めるわけにはいかない。当時は劇中によく歌が挿入されたから、女優である以上、無理をしてでも歌わざるをえなかったのである。

それより、「カチューシャの唄」の裏面の「復活唱歌」では、彼女の舞台での台詞が、おさめられている。さすがにこちらは本職だけに、よく声がとおり明快である。自分の男運の悪さを訴えている場面だが、声にも艶があり、須磨子らしい気取りがうかがわれる。ややもったいぶった感じがないでもないが、当時の新劇自体が、そういういいまわしを求める傾向があったのだから

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

仕方がない。

この声には当時のナンバーワン女優としての気迫と自信が溢れている。

このレコードを貸して下さったのは、須磨子の養女であり、姪にもあたる小林勝子さんである。須磨子の本名は小林正子で、長野県松代の出身だが、勝子さんは、須磨子の長兄である放蔵氏の娘である。長じて、そのまま小林姓を引き継がれて、現在、東京の桜上水に住まわれている。

新宿から甲州街道を行き、桜上水の歩道橋の手前を左に入ってすぐの、街なかにこんな静かなところがあるかと思うようなところにお宅がある。

木造の、古いががっしりした建物で、広い玄関を入ってすぐの応接間に、須磨子の写真が飾られている。横に長い腰かけ椅子の片側に、着物姿で軽く横向きになっている。大正二年、抱月とともに芸術座にくわわった二十七、八歳ころの須磨子かと思われるが、ふっくらとした輪廓のなかに、目の張った勝気さが見える。

勝子さんは、すでに七十歳に近いが、もし須磨子が生きていたらこうかと思わせるほど、目元の張った感じといい輪廓のやわらかさといい、よく似ている。

この勝子さんは、八歳のとき須磨子の養女になったが、そのあたりの経緯を次のように話してくれた。

「東京へ出てきた当時は、〝おばさん〟と呼んでいたのですが、途中から〝先生〟と呼びなさいといわれて、〝先生〟と呼ぶようになりました。島村先生のことも〝先生〟と呼んで、同じだったのですけど、どういうわけでしょうか、間違えることもなく、うまくいっていたのですね。私

は養女ということで、入籍もしたのですけど、だからとくに娘のように、可愛がられた、という記憶もありません。先生が私を養女にしたのは、家を継がすということより、自分の意のままになる子役を欲しかったからだと思うのです。まだ劇団ができたばかりで子役がなく、初めのころは歌舞伎から借りたり、普通の家のお子さんを借りたりしたようですけど、なかなか思うようにゆかず、自前で養成しよう、ということになったんだと思います。

私が芸術座にきたときは小学校の一年生で、学校にも行かなければならなかったのですけど、先生は、練習があるから学校は休んでしまいなさいって、舞台のことしか頭になかったので、よく私の父といさかいなどしていました。

そんなわけで、東京へきた早々から、踊りや舞台の稽古をさせられたのですが、私一人では足りないというので、もう一人、木村若さんという、私より一つ下の子も養女にしました。わかちゃんは、十四世将棋名人の木村義雄さんの妹さんでもあるのです。

とにかくそんな具合に、舞台のためとなると、はた迷惑など考えず、強引におしすすめる人でしたけど、それだけ舞台に熱中していたのだと思います」

勝子さんは淡々と語り、ふっと笑う。その横顔に、須磨子の写真では見られない生き生きした表情をうかがうことができる。

この勝子さんと若さんは、大正七年九月に公演された「沈鐘」で、ともに子役として舞台を踏んでいる。

だが、それから約半年後の、大正八年一月五日、須磨子は抱月のあとを追って芸術座の舞台裏

で、愛する人、抱月からもらった赤い伊達締めで縊死する。

「先生と一緒だったのは、ほんのわずかで、それも小さいときでしたから、島村先生などとの立ち入った事情はなにも知りませんでした。先生はとくに怖いということはなかったのですが、舞台の稽古になると、人が変ったように厳しい表情になって、養女だからといって、手心をくわえるようなことはありませんでした。普段も忙しくて、あまり口をきくこともありませんでしたが、でも時に、突然可愛がってくれたりして、そういうときは、着物でもなんでも買って呉れて、その変り具合に、むしろ私達のほうが戸惑ったくらいです。それにくらべて、島村先生はいつももの静かで、なにかを考えこまれているようで、直接お話しした記憶もほとんどありません」

勝子さんの話をきくうちに、自然に、須磨子と抱月二人の対照的な姿が浮かんでくる。

この勝子さんの他に、いま一人、やはり須磨子の姪にあたる小林久子さんが、須磨子の実家のある松代に健在である。

私が松代を訪れたのは、四月の半ばのよく晴れた日の午後であった。

松代といってもいまは長野市に含まれ、長野から南東へ川中島の古戦場を経て千曲川を渡り、東から三国山脈がつき出してくる、その突端に松代の町がある。

かつては真田氏十万石の城下町で、明治初年には製糸工業の中心地でもあった。昭和に入ってからは、頻発する地震で有名になり、南の一角に日本最大の地震観測所がある。北面の長野に抜ける一方を除いては、すべて山に囲まれ、かつて日が半日しか当らぬところから「陽の影村」と

も、「半日村」とも呼ばれたが、私がいったときは、春の陽光が溢れ、そうした山国の暗さはなかった。

須磨子の生家は、この町の北東の小丸山という山裾にある。このあたりは清野と呼ばれ、須磨子の祖父は清野一帯を領する豪農で、幕末のころには真田家から士族の待遇を許されていた。この祖父の代まで、小林家は昔の格式を保ち、いまも生家のある小丸山の麓から、南の象山口まで、山裾一帯の田畑は小林家のものであったらしい。それが須磨子の父の代になって、株から生糸、さらに米相場にまで手を出して失敗し、次々と土地を手離さざるをえなくなった。それでも須磨子の生家は、裏山に続く庭を含めてかなり広い。山沿いを走る広い通りから、山ぎわへ入り百メートルほど登ったところに、古い長屋門が残り、往時の面影を残している。実家は、須磨子の生まれたころの茅葺きの家はすでになく、新しい家に建てかえられている。

私が訪れたとき、久子さんのご主人は入院中とかで、久子さん一人が、待っておられた。

一目見たとき、私はその姿が、須磨子の外見と同じくらいかと思った。久子さんは、今年七十六歳になられるが、明治の女としてはやや大きく、大柄といわれた須磨子の姿を、よく写しているように思われる。

久子さんは、須磨子の五番目の兄の子で、東京の勝子さんとは従姉妹同士にあたる。勝子さんが、須磨子のやわらかな顔の輪廓を残しているのにくらべて、久子さんは目もとから鼻に至る線がよく似ている。

いまの家とは違うが、この場所にあった実家に、須磨子は女優になってから一度来ている。長

野へ公演にきて立寄り一泊したのであるが、そのときはすでに大女優で、家の勘当もほとんど解けていた。地元にある、須磨子会の会長である、斎藤勲氏の話では、そのとき松代の町で盛大な歓迎会が開かれ、ときの町長が歓迎委員長になったが、町長自ら河原乞食の後援者になるとはなにごとと、憤慨した者もいたという。古く、封建色の濃かったこのあたりでは、まだまだ頑固な人達が多かったのであろう。

このとき生家に立寄った須磨子を、久子さんは見ている。

「おばあさん（須磨子の母）と二人で話しているのを見ただけでしたけど、あの人を〝みぐさい、みぐさい〟という人もいますが、わたしは品のある、美しい人だと思いました」

〝みぐさい〟というのは、このあたりの方言で、「醜い」という意味である。たしかに、当時の東京の演劇関係の人達のなかには、須磨子を粗野な山だし同然の女、というようないい方をする者もいた。しかし子女の教育に厳しかった松代藩の、なかでも儒者として人望のあつかった曾祖父の血を受けた須磨子であれば、品よく美しかったという、久子さんの話も身内の贔屓目だけとも思えない。

実際、斎藤氏の家にあった、東京に出る前の娘時代の須磨子の写真はきりりとして美しい。

「家には、記念になるようなものは、なにもありません」

久子さんは申し訳なさそうにいうが、死後六十年も経て家も変れば無理はない。それに資料というべきものは、ほとんどが養女である勝子さんのほうに集められたようである。

私は生家のあたりの風景も、当時と変ったのかと思ったが、久子さんの話では、「まったく昔

と変りません」ということだった。
山ぎわで一段高くなっている家の前から見下す清野一帯は、田圃とキュウリ、ナガイモ、レンコンといった畑が続き、人家もほとんど増えていないらしい。強いて変ったといえば、ビニール栽培の白い袋が、陽に輝いているだけらしい。
私は改めて奥の座敷の先に見える庭に目を移した。南に面した庭はさまざまな躑躅が並び、そのあいだを、沢から引いた清水が滝になって池に注ぐ。
「昔は、この池ももう少し大きく、子供のころは水遊びをしたものです」
躑躅の先には梅と桜が咲き、さらに新緑の竹藪から小丸山の斜面が迫っている。
「今日は、よく陽が射してますけど、山のおかげで、じき陽が陰って暗くなるのです」
久子さんは少し憂鬱そうにいった。
私は礼をいって生家を辞し、一旦門を出て、そこから山腹を二百メートルほど登った。
左右は桑畑で、まだ葉をつけぬ木だけが規則正しく並んでいる。それが途切れた先に桜の巨木があり、そのまわりに小林家の墓が並んでいる。須磨子の墓はほぼなかほどに、斜面の北向きに、清野を見下す形で建てられている。
「貞祥院実応須磨大姉」
墓石にはそう刻まれ、横に「大正八年一月五日」と没年が記されている。午後三時を過ぎて、陽はすでに傾き、小丸山から妻女山に続く山影が、須磨子の墓石にかかろうとしている。
この墓から私は山ぞいにさらに一キロ行き、林正寺の境内にある須磨子の演劇碑を訪れてみた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com